

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



第25回読売NIEセミナーで道德の授業案を練るワークショップに臨む教員ら。鹿野川NIE企画デザイナー（右から3人目）も一緒に考え、アドバイスを送った（読売新聞東京本社で）（記事2・3面へ）

巻頭特集 3人の教諭が実践発表 ワークショップでは教材となる記事探す

「道德に新聞」テーマに 第25回読売NIEセミナー 2・3

第10回全国高等学校英語スピーチコンテスト 4・5

学校×企業 アメリカンスクール・イン・ジャパン×キッコーマン 6
東京・稲城六中×神田外語学院 7

読売新聞校閲記者が聴覚障害者に講演／お知らせ・短信 8 第1回書店員ビブリオバトル 9
リレーエッセー 米ハバフォード大学「コミュニケーション作りの実験室」 10

2017.3
Vol.27

ワークショップ

子どもたちの現状踏まえ、記事を探す



ワークショップで教材になりそうな記事を探す教員ら

ワークショップは、鹿野川・NIE企画デザイナーの指導で、新聞を使った道徳の授業案作りに取り組んだ。

参加者は2～5人のグループに分かれ、まず、子どもたちの気になる現状を議論。それをもとにテーマを決め、配布された新聞をめくって、教材になりそうな記事を探した。

小学5年生を担当する、ある教諭は、支援が必要な児童が仲間はずれにされがちなのが悩み。このグループでは、国際パラリンピック委員会会長のインタビュー記事「豊かな世界は違いを認める」に注目。多様性を認め合い、他者と偏見なく接する大切さを読み取ることで、子どもの変化を促そうとする授業案を考えたと。

「すぐあきらめる」「いじめがある」「向上心がない」と、一見ばらばらな問題点を挙げたグループは、話し合ううちに、「自己肯定感の欠如」というキーワードに行き着いた。選んだのは、冬季アジア大会で活躍するフィギュアスケート宇野昌磨選手の記事。自分の演技に満足せず、さらに上を目指す姿勢から、自己への厳しさ、努力、成長などを生徒たちに考えさせようというプランを立てた。

熱心な意見交換が続き、もっと時間がほしいという声も上がったほどだった。



現実社会と教室の懸け橋

神奈川県藤沢市立明治小
織田宗之 教諭

新聞は葛藤が詰まった「考える教科書」。授業で使えば、現実社会と教室を結ぶ「懸け橋」になります。

3年生の道徳で、いじめの問題を取り上げました。松谷みよ子の絵本「わたしのいもうと」を読み聞かせた後、いじめ防止

対策推進法に関する記事と、紙上の谷川俊太郎さんの詩を紹介しました。絵本は重い物語ですが、子どもの表情は真剣そのもの。新聞記事によってより身近な問題として考えられました。

新聞は主たる教材にも使えます。活用を続けると、教師側の記事を見つけるセンスや道徳観も磨かれます。

3人の教諭が実践発表

冒頭、本紙夕刊1面コラム（一部地域、朝刊2面）「よみうり寸評」を担当する清水純一・本社論説委員が「道徳とコラム」と題して基調講演。「豊かな心情を育むだけでは正邪の判断はできない。そこには知識が必要だ」と述べ、多くの事実が報道された新聞を、道徳の教材として活用する利点を説いた。

続いて、小中高の3教諭による実践発表が行われ、視覚障害者が駅のホームから転落死したことを報じた記事から、自分たちができることを考える授業など、様々な新聞活用例が報告された。発表を受け、西野真由美・国立教育政策研究所総括研究官は「体験を通して学ぶことは大切だが、新聞からは体験を超える知識を得ることができる」と講評した。

鹿野川喜代美・本社NIE企画デザイナーによるワークショップ（実践講習）では、参加者が手元の朝夕刊をめくりながら教材になる記事を選び、道徳の授業案を考えたと。

参加者からは「子どもが興味を持てる教材作りのヒントが得られた」「新聞を使えば、よりよい生き方につながる授業ができると再認識した」などの感想が聞かれた。

第25回 読売 N I E セミナー

道徳の授業に新聞を活用する道探る

「道徳に新聞」をテーマにした第25回読売NIEセミナーが2月25日、読売新聞東京本社で開かれた。2018年度から小学校、19年度から中学校で「特別の教科」となる道徳の授業に、新聞を活用する手法を学ぼうと、北海道から沖縄まで全国の小中高の教員や大学生ら72人が参加した。

体験を超える知識を得られ、視野が広がる深い学びにつながるのが、新聞の大きな役割だと実感しました。

新聞を使う意義として、①答えが一つでない問題を扱い、葛藤させる教材として活用できる②リアルな現実を扱い、問題を客観的に深く考えさせられる③現代的な課題を扱い、その部分が少ない教材をカバーできる——が挙げられます。

新聞を題材にすれば、主体的に読んで考えをまとめ、発表する「調べ学習」を行えます。これはこれまでの道徳の授業ではしてこなかったことで、考え議論する道徳につながります。

国立教育政策研究所
西野真由美 総括研究官

視野を広げ深い学び生む

講評

生徒の進路決定にも貢献

埼玉県立羽生第二高
坂庭千絵 教諭

道徳、キャリア教育、総合的な学習を複合した「在り方・生き方教育」の中で、新聞を使い視野を広げることが目標にしました。

本校では、クラスごとに新聞4紙が毎日配達されます。その環境を生かして、スクラップを

続け、切り抜き作品をコンクールに出品しました。新聞社提供のワークシートは解くだけでなく、グループでの話し合いや全体発表につながっています。

新聞を通して社会を知り、自分ならどうするかを考えることは、自分の在り方、生き方を見つめることにつながり、生徒の進路決定にも役立っています。



一つの話題 多角的に議論

相模女子大学中部 神奈川県
堤真美 教諭

命と向き合い、自分の生き方を考える「マーガレットタイム」の中で新聞を活用しています。

1年生の授業で、視覚障害者が駅のホームから転落死した記事を読み、事故を防ぐためにできることについて話し合いました。視覚障害者が白杖で点字ブロックをたたく理由を知った生徒たちからは、「大声で話さないように気をつける」などの

の意見が出ました。

新聞は情報の蓄積ができて、一つの話題について多角的な見方ができます。社会の現実を伝える新聞だからこそ、生徒たちは真剣に向き合うことができます。



3年前から「よみうり寸評」を担当しています。前日に書くとは鮮度が落ちるので、朝、新聞を読んで、その勢いで書き上げるようにしています。料理に例えると、何日もかけて具材を煮込むシチューではなく、豆腐やワカメを入れて毎朝作るみそ汁のようなものです。

読売新聞東京本社
清水純一 論説委員

道徳の本を読むと、「豊かな心情を育む」「正邪の判断」というキーワードが書かれています。ただ、どんなに豊かな心情を育んでも、そこに知識がないと正邪の判断はできません。昨年、アイドルグループがナチス・ドイツの制服を想起させる衣装を着用し、米国のユダヤ系人権団体から謝罪を求められるというニュースがありました。知識がないことが、ときに人を傷つけることもあるのです。

心情と判断とをつなぐのが知識です。様々な事実を報道した新聞からは、たくさんの知識が得られます。社説は論を重視しますが、コラムは心情を重んじます。そんなコラムの中に、これからも事実を投げ込んでいきたい。引き続き読んでいただければと思います。

正邪の判断 知識が必要

基調講演

受賞者(敬称略)

第1部

第1位◆文部科学大臣賞・文部科学大臣杯

「Stop! In the Name of Love」

牧野かのん

旭川藤女子高2年(北海道地区)

第2位◆読売新聞社賞

「Let Us Shine」

宮沢愛花(あいか)

千葉県・翔凜高2年(関東甲信越地区)

第3位◆全英連会長賞

「Throwing Away the Shame」

原田麗命(れいな)

神戸市立葺合高2年(近畿地区)

第4位◆全英連会長賞

「Fashion That Is Full of Love」

麻生理央

青森県・八戸聖ウルスラ学院高2年(東北地区)

第2部

第1位◆外務大臣賞・外務大臣杯

「Your English」

一居成(いちい・じょう)

静岡県立静岡高1年(東海北陸地区)

第2位◆読売新聞社賞

「Reality, Not History」

田辺壮太郎

東京都立国際高3年(東京地区)

英語圏に通算1年以上上りた経験がない生徒らが第1部に、英語圏で通算1年以上暮らしたことがある生徒らが第2部にそれぞれ出場した。

第10回 全国高等学校 英語スピーチコンテスト

第10回全国高等学校英語スピーチコンテスト(全国英語教育研究団体連合会主催、読売新聞社など後援)が2月12日、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた。地区大会を勝ち進んできた18人が出場し、第1部は北海道・旭川藤女子高2年の牧野かのんさんが、第2部では静岡県立静岡高1年一居成さんがそれぞれ優勝した。

文部科学大臣賞に牧野さん

第1部 1位

愛にレッテルはいらない

旭川藤女子高2年 牧野かのん

自身の取り組みを交えながら、性的少数者(LGBT)の問題をテーマにスピーチし、「愛にレッテルはいらない」と会場に呼びかけた。

留学中に、女性の友人からそう告白された。クラスメートは、レズビアン(女性同性愛者)やゲイ(男性同性愛者)がいても、それを普通のこととして受け入れていた。

2017年の高校の家庭科教科書に初めてLGBTが取り上げられたことなどにもふれながら、LGBTを個性としてとらえ、多様性を認める社会にしようと提案した。



牧野かのんさん

ーランドと日本との違いを実感し、帰国後、同級生からアンケートをとるなどして校内で議論を深めた。両親がレズビアンの生徒の話も交えながら、日本人はただこの問題をひと

ごとと考えていると指摘した。2017年の高校の家庭科教科書に初めてLGBTが取り上げられたことなどにもふれながら、LGBTを個性としてとらえ、多様性を認める社会にしようと提案した。

外務大臣賞に一居さん

第2部 1位

日本人の英語

静岡県立静岡高1年 一居成

9年間の英国での経験から、「発音や文法が間違っている構わない。大切なことは英語で何を話すかだ」と訴えた。

「日本人は完璧にできるまで自信を持ってない」「英語を単なるコミュニケーションのツールとしてより、習得すべき技術と見て」

とり始めよう」と訴えた。世界に様々な英語があることを、引用した本の書名、筆者名に言及して説明した点も評価された。



一居成さん

「日本人は完璧にできるまで自信を持ってない」「英語を単なるコミュニケーションのツールとしてより、習得すべき技術と見て」

「英語はできる人がやればいい」と英語を学ぶことにためらいがちだったのを見て、違和感を覚えた、という一居さん。「完璧でなくてもいいから、コミュニケーションをとることの方が重要だ、というメッセージを込めた」という。「この結果は信じられない。将来は英語を使える仕事に就きたい」と喜びを語っていた。

2位 女性が輝くために



宮沢愛花さん

「元始、女性は実に太陽であった」。冒頭、平塚らいてうが文芸誌「青鞥」に記した創刊の言葉を引用し、女性が社会で輝く方策を訴えた。

ノルウェーの会社では管理職の40%が女性でなければいけないことなどを紹介。一方、日本の女性管理職は3.1%にとどまり、昨年の待機児童数は過去最高に達したと問題提起した。

こうした状況を打開するヒントとして、ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんの父親をまず挙げた。「私は娘の翼をまがなかっただ

「2位という結果は悔しいけど、みんなに伝わるスピーチをとという目標は達成できた」と宮沢さん。「もつと英語を勉強して、自分の可能性を広げたい」と今後の抱負を語った。

3位 神戸市立葺合高2年 原田麗命

「昨年2位だった先輩が目標だったので、ちょっと悔しい。友人から『クラミジアになり、もう子どもを産めない』と打ち明けられ、日本の性教育をテーマにしようと決めた。海外の事例を調べるだ

4位 八戸聖ウルスラ学院高2年 麻生理央

「スピーチでは100%自分の力が出せた。子どものころからファッションが好きで、服をスケッチしたり、選んだりするのが楽しかったし、今でもファッションデザイナーになることが夢。コンテスト



原田麗命さん

けでなく、産婦人科の看護師の話も聞いて、友人のような思いをする人がいなくなるようにとの思いを込めた。将来は、英語を人のために使える仕事に就きたい」



麻生理央さん

に出る、と決めてから、人気のファスト・ファッションの裏に働く人の悲惨な状況を学び、服を作る人たちのことも考えた服作りをしたいと思うようになった」

2位 奴隷制をなくすために

東京都立国際高3年 田辺壮太郎

奴隷制は現在もある、その現実から目を背けず、なくしていこう。このメッセージをひたすら訴えた。

米国のリンカーン大統領が1862年、奴隷解放を宣言して奴隷制は終焉を迎え、現在奴隷制は存在しない、と信じていたが、友だちが「今でも続いている」と主張した。それが間違いだ証明したくて調べたところ、現実には、世界に3000万人近くの人々が奴隷状態で強制的に働かされ、その4分の1は18歳未満、という事実を知った。

その衝撃を「奴隷制がある、という事実ではなく、自分が無意識に無視してきたことが信じられなかった」と表現。最後に「奴隷制をなくす



田辺壮太郎さん

ためには、標的となる子どもへの教育だ」と提案、「今から行動を起こそう」と訴えた。今春大学に進学する田辺さんは「大学では、全国学生英語プレゼンテーションコンテストに参加して自分の英語を磨きたい」とやる気満々。レセプションでは、1位になった一居さんを念頭に、「今度はインド人なまりの英語を覚えて参加したい」と英語であいさつして会場の笑いを誘っていた。

しょうゆ 通して 日本文化を学ぶ

アメリカンスクール・イン・ジャパン

× キッコーマン

東京都調布市のアメリカンスクール・イン・ジャパン（ASIJ）で2月10日、しょうゆを通して日本文化を学ぶ授業が行われた。日本文化への理解を深めようという同校の取り組みに、大手しょうゆメーカーのキッコーマンが協力して実現した。子どもたちにとっては、五感をフルに働かせ、「食」の奥深さに触れる体験となった。

〇色や香りを体感

この日の授業では、「しょうゆ博士」の斉藤文秀さん（キッコーマン国際食文化センター）が、講師を務め、日本の小、中学生にあたる約120人が参加した。



「しょうゆ博士」の斉藤文秀さんからしょうゆの原料について学ぶ



「オレンジ色をしているね」。キッコーマンしょうゆ塾事務局のスタッフ（左）が、完成品の色合いを紹介

最初に、斉藤さんが「どんな料理にしょうゆが使われているですか」と問いかけると、「すし」「餅」「卵かけご飯」と、次々と元気な声が。レトルトのカレーやスナック菓子にもしょうゆが使われていると説明されると、「えーっ」と驚きの声が上がった。

しょうゆ造りについては、材料となる大豆や小麦、塩に「こうじ菌」を加え、発酵させるこ

とで、独特の色や味、香りが生まれることを、映像を使いながら分かりやすく解説した。

しょうゆを搾り取るために、2000本の力でプレスすることや、しょうゆの香りには、果物やキノコ、花など300種類の香りの元が含まれていることを聞いて、子どもたちは顔を見合わせビックリした様子だった。

一見、黒や茶色に見えるしょうゆに、光を当てると本来の「明るい赤だいたい色」が浮かび上がることが分かると、教室のあちこちから「うわあー」と歓声がわき起こった。

講義は食にまつわる日本の文化にも及び、搾りかすも家畜の飼料として利用されているという説明に、「へーっ」と感心していた。

〇命を「いただく」精神

締めくくりは「おいしい物を食べる」と「おいしく物を食べる」の二つの言葉をならべ、その意味について考えた。斉藤さんは、「いくらおいしい物があっても友達とけんかして、泣きながら食べてはおいしくない」と語



搾りかすの匂いをかぎ、しょうゆへの理解を深める子供たち

りかけ、楽しい会話や笑顔、お手伝い、あいさつがおいしく食事をするコツだとアドバイス。『いただきます』は「命をいただきます。ありがとう」という気持ち。『ごちそうさま』は作ってくれた人への感謝」と、普段なにげなく使っている言葉に込められた意味について語りかけ

ると、教室のそこかしこでうなずく子供たちの姿が見られた。受講した男子児童（11）は「しょうゆ造りにたくさんさんの秘密がかくれている面白かった」、別の女子児童（11）も「しょうゆの奥深さに驚いた。初めて知ることがたくさんあった」と、授業を楽しんだ様子だった。

MEMO

ASIJは1902年（明治35年）に設立された日本初のインターナショナルスクール。現在、幼稚園児から高校生に相当する児童や生徒約1600人が通い、国籍は約50か国に上る。2015年9月には日本語や日本文化を学ぶ拠点「ジャパンセンター」を設立した。キッコーマンは、05年から出前授業「キッコーマンしょうゆ塾」を実施し、今では年間約100校で授業を実施。両者とも16年から読売教育ネットワークに参加している。



生徒たちに英語プレゼンテーションの必要性などを話すレンフロ比佐子さん

体育館で講義に聞き入る稲城第六中の生徒たち



稲城六中

× 神田外語学院

「英語でプレゼンテーションをしてみよう」をテーマに、神田外語学院による出前授業が3月3日、東京都稲城市立稲城第六中（梅原郁雄校長）で行われ、約500人の生徒たちが、英語によるプレゼンテーションの必要性や方法を学んだ。

英語でのプレゼンテーションを学ぼう

神田外語グループと読売新聞社が主催する「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」の詳細が掲載された読売新聞を読んで、英語教育に力を入れている稲城六中から、主催の神田外語グループに「実演を」という依頼があり、実現した。このコンテストは、英語力だけでなく、論理的な思考や説得力などを、大学生らが画像や映像を交えて競うもので、昨年12月に第5回が行われた。

「聞き手を感動させるものを」

講師は、語学専門学校「神田外語学院」グローバルコミュニケーション科のレンフロ比佐子さんは、「なぜプレゼンなのか」「なぜ英語でやるのか」という問いを生徒たちに投げかけつつ、プレゼンテーションには、テクノロジー（技術）の「T」、エンターテインメント（もてなし）の「E」、デザインの「D」の三つが必要だと説明。「この三つを意識して、プレゼンの中身を作っていくことが重要だ」と話した。

その上で、「プレゼンは聞き手があつて成り立つもの。今、国際社会は変化し続けている。だからこそ、聞き手に感動をもたらすようなものを作っていこ

う」と呼びかけた。

「メッセージを伝えよう」

また、プレゼンテーションには、①説話型（Narrative）②情報型（Informative）③説得型（Persuasive）——の三つの型があるが、目標とするプレゼンは、三つ目の説得型で、問題（Issue）、解決策（Solution）などを訴えることが重要だと指摘した。そして、「いいプレゼンとは、リサーチ、練習、チームワークを欠かさず、メッセージをきちんと伝えることだ」と強調した。

そのためには、「論理、分析だけではなく、なぜ（Why）という疑問が大切で、最終的には一見関係なさそうな事柄を結びつけ、全く新しい製品やサービス、技術を生み出すInnovation（新機軸）やCreativity（創造性、独創力）をもてるようにしよう」と訴えた。

質問を交え、やさしく

難しくなりがちな話の中で、「頭がいい人とは、どういう人のことですか」「具体的に思いつく、頭のいい人は誰ですか」といった質問を交えて生徒たちに考える機会を与えたほか、いいプレゼンの例として、コンピューターゲームの任天堂で社長を

務めた故・岩田聡さんの「最初の10秒でプレゼンの成否は決まる」ということを紹介。大成建設による赤坂プリンスホテルの解体工事の様子などを動画で見せるなど、生徒をあきさせない工夫もあり、聞いていた生徒たちも目を輝かせていた。

プレコン参加の学生が実演

レンフロさんの講演のあと、昨年の第5回全国学生英語プレゼンテーションコンテストに参加した神田外語学院の学生3人が「日本の防災・減災ノウハウを世界にアピール！」を英語で約10分間実演。体育館に集まった生徒たちは、先輩たちのプレゼンに熱心に聞き入っていた。最後に、全校を代表して村崎恵依美さん（3年）が「すばらしいプレゼンテーションをありがとうございました」と英語で感謝のメッセージを伝えた。



神田外語学院の学生による英語プレゼンも披露された

本紙記者が「校閲」をテーマに 聴覚障害者に講演

東京都聴覚障害者連盟からの依頼を受け、読売新聞東京本社校閲部の山内葉央子記者が2月18日、東京・渋谷区の東京聴覚障害者自立支援センターで、「新聞校閲について」と題して講演した。受講した約20人は、ふだん広報などの仕事に携わっている聴覚障害者。話には、文字や文章が多く出てくるため、手話通訳のほか、要約筆記もついた。

自身も9歳で耳が不自由に

山内記者は、9歳で片耳の聴覚を失い、15歳でほとんど聞こえなくなった。補聴器などを利用しながら、学習院大学文学部を卒業、1997年に校閲記者として入社した。

講演では、まず新聞社での校閲の仕事を紹介。紙面ができあがる流れの中で、記事をチェックする校閲記者は「最後の記者であり、最初の読者である」とのこと、毎日締め切りがあつて時間に追われるため、事前準備と優先順位をつけることが大切であることなどを、パワーポイント

を使いながら説明した。

また、意味や使い方が変化したつある言葉のうち、判断に迷う実例をクイズ形式で示した。「やおら」の意味は「急に」か「ゆっくりと」か、「議論が煮詰まる」とはどういう状態か。世論調査で意見が割れる言葉は、できるだけ言い換えるという。

「新聞社なので筆談しやすい」

聴覚障害で電話でのやり取りが難しかったため、問い合わせなどは原則として直接会って行う。筆談になることもあるが、「新聞社は、いつもペンと紙を持っていて、書くことに慣れている社員ばかりなので、働きやすいですよ」と笑顔で語った。

会場から「漢字の読み方はどのように学ぶか」という質問が出た。聴覚障害者は人の話やテレビの音声聞く機会が少ないので「豊洲市場」の読み方が「いちば」なのか、「しじょう」なのかで悩んだりするという。山内記者は「確かに難しい。本や新聞を読んで気になった言葉は丹

念に辞書で調べるなど、意識して勉強を続けています」と答えた。

受講者からは「聴覚障害があると文章に携わる仕事はできないのではと思っていた。山内さんの話に励まされた」という声が上がった。



校閲の仕事について語る山内記者（左奥）。手話通訳だけでなく、パソコンによる要約筆記もついた講演になった

News

新NIE企画デザイナーに 秋山純子氏

読売新聞社の新しいNIE企画デザイナーに4月1日、秋山純子氏＝写真＝が就任した。前任の鹿野川喜代美氏に代わり、新聞を授業で活用する方法について、現場の教諭らに指導・支援をしていく。



秋山氏は東京都立中学校の国語科教諭、都教育庁指導主事などを経て、中学校長を11年間歴任。現在、跡見学園女子大非常勤講師、2014年度から文化庁文化審議会国語分科会委員を務める。

秋山氏は「38年間の教職生活で、授業だけでなく様々な場面・機会に『新聞』を活用してきた。鹿野川さんからNIE企画デザイナーのバトンを、しっかりと引き継いでいきたい」と話している。

「特派員直伝 とらべる英会話」が本に

読売新聞日曜日付の朝刊英語面「えいご工房」で好評連載中のコラム85回分をまとめた「特派員直伝 とらべる英会話」が研究社から出版されました。

読売新聞の海外特派員49人が、任地でのふだんの暮らしで交わした英語でのやり取りや、出張先でのトラブルで問題解決に必要な英語がわからずに格闘した体験談などを題材に、海外旅行で役立つ言い回しや、英語独特の表現を紹介しています。一般の英会話教材とはひと味もふた味も違った読み物としても楽しめます。

「まだ食べているんですけど」「それだと遠回りです」「最近何にはまっていますか？」などと言いたい時、英語では何と伝えればいいでしょう。そんな疑問への答えが本書には満載。新聞社の海外特派員の仕事ぶりや生活も垣間見ることが出来ます。海外旅行のお供や、外国人訪日客への英語でのおもてなしにも、役立つこと請け合いです。四六判。1300円（税別）。





「本にだって雄と雌があります」
小田雅久著、新潮社

書店員をバトラーとする「第1回書店員ビブリオバトル」(活字文化推進会議主催、読売新聞社主管)が1月27日、東京駅日本橋口のサピアホールを会場に開かれた。1都3県から6人が参加。千葉県船橋市「ときわ書房」の近藤隆さんが紹介した「本にだって雄と雌があります」(小田雅久著、新潮社)が初代チャンプ本に輝いた。「本のソムリエ」が各書店の威信をかけて競う大会だけに注目度は高く、ほぼ満席となる約300人の聴衆が詰めかけた。



書店員のビブリオバトル初の開催



第1回書店員ビブリオバトルで優勝した
「ときわ書房」の近藤隆さん

ときわ書房の近藤さんが優勝

近藤さんの紹介本は、本同士が結婚して出産もするという奇妙な世界が展開されるユーモア小説。

近藤さんは「小説好きでいたことに対するごほうびのような小説」「(読後は)本好きで良かったと温かい気持ちになれる」などと絶賛した。



準優勝の市川紀子さん(有隣堂)

浅田次郎さんと長田渚左さんがトークセッション

ビブリオバトルに続き、作家の浅田次郎さんと、ノンフィクション作家で活字文化推進会議のサポーター委員を務める長田渚左さんのトークセッションも行われた。

浜っ子の市川さんは「いつも工事ばかりで、もつときれいなればいいの」と思っていた横浜駅だったが、この本に出会って愛情を持つようになった」と、思い入れたっぷりに聴衆に語りかけた。

準チャンプ本は、横浜市「有隣堂」の市川紀子さんが紹介した「横浜駅SF」(柞刈湯葉著、KADOKAWA)。日本が自己増殖する横浜駅に支配されるというSF小説だ。

浅田さんは

「読書をしていては、勉強したいに何か得ようとしなくて、ただオモシロおかしく過ごせばいい」などと話し、聴衆を沸かせた。

読売新聞東京本社に事務局を置く活字文化推進会議は、ビブリオバトルの可能性に着目。2010年から大学生大会を手始めに普及に力を入れてきた。2014年から高校生・の全国大会も開催、中学生大会も2015年から関東と関西を中心に手がけている。今回初の試みとなった書店員ビブリオバトルは、ときわ書房をはじめ、有隣堂、紀伊國屋書店、三省堂書店、あゆみBOOKS、大盛堂書店と、知名度の高い書店からの参加となった。次回以降は地方書店や小規模店からの参加も促し、一層の充実を図っていく予定だ。



ゲストの日本ペンクラブ会長・浅田次郎さん(右から4人目)、作家・長田渚左さん(左から3人目)を囲んで記念撮影に納まる書店員バトラー

- 石岡千裕(仙台市・あゆみBOOKS)
「問いのない答え」長嶋有著、文春文庫
- 市川紀子(横浜市・有隣堂)
「横浜駅SF」柞刈湯葉著、KADOKAWA
- 内田 剛(東京都・三省堂書店)
「ツバキ文具店」小川糸著、幻冬舎
- 近藤 隆(千葉県船橋市・ときわ書房)
「本にだって雄と雌があります」小田雅久著、新潮文庫
- 瀬部貴行(東京都・紀伊國屋書店)
「言語が違えば、世界も違って見えるわけ」
ガイ・ドイッチャー著、インターシフト
- 山本 亮(東京都・大盛堂書店)
「ツタよ、ツタ」大島貞寿著、実業之日本社

出場者と紹介本(敬称略)

海外で学ぶ・リレーエッセー ②7

米ハバフォード大学「コミュニティー作りの実験室」

立教女学院高校（東京都）卒、ハバフォード大学2年（執筆時）

野田 萌佳さん



「自分をさらけ出しなさい」と舞台上立つ学部長が語りかけた。1年前に行われたハバフォード大学伝統のオリエンテーション、「カスタムズ・ウィーク」の開会式的一幕だ。この言葉を聞き、「ああ、やっぱりこの大学にきて良かった」と、胸が高鳴ったことを今でも覚えている。

カスタムズ・ウィーク3日目の夜、私たちはみな暗闇の中にいた。19人の学生が輪になって1本のろうそくを囲み、始まったのが「ブルーリズム」（多様性）という名の伝統イベントだ。「私たちはこれから同じ寮で共に暮らしていくことになり。そこで、今夜はみんなが自分を理解してもらうために大切だと思ふことを仲間にシェアする時間を作ります。育った環境、今までの経験、価値観、なんでも話してください」。世話役の上級生がこう説明し、私たちの長い夜が始まった。

長い沈黙の後、1人の女子学生が話し始めた。「私は家族から逃れなくては大学にきました」話し終えたとまた長い沈黙。



学友たちに囲まれる野田萌佳さん（前列右から二人目）＝本人提供

「父は私が7歳の時に自殺したのです」。沈黙とすすり泣く声。ブルーリズムが終わり時計を見ると、5時間が経過してい

た。ここで私たちは、自らのアイデンティティー、家族のこと、経験してきた苦悩などをさらけ出した。長い沈黙や何人かが涙

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。



ハバフォード大学

1833年の創立で、米ペンシルベニア州フィラデルフィア郊外にある。学生と教授陣の比率は9対1。リベラルアーツの学部学生の98%はキャンパス内に住んでいる。

を流す場面もあったが、どこか深いところまでつながりがもてたような気がした。この夜を締めくくったグループハグを私は忘れることができない。

約1200人の学生で構成される、小さいながらも多様なハバフォード大学というコミュニティーは人との「共存」を学ぶのに最適な場所だと確信している。この大学では、対話が文化として根付いており、異なる意見やバックグラウンドを持つ人とも、対話を通してお互いを尊敬しあい、理解するよう努めることが学生の間に非常に重視されている。ブルーリズムを経験して、この大学がさらに好きになったし、またこの大学で自

分をさらけ出し、困難に挑みながら成長していこうと決意を新たにした。

私がハバフォード大学への入学を決めたのは、メンバー一人ひとりが心地よく感じ、成長に貢献できるコミュニティー作りをしていることに関心を抱いたからだ。相互信頼関係、自分の言葉への責任感に基づく対話が根付くハバフォード大学はコミュニティー作りを経験する上で最適だ。現在私は、都市デザインと心理学の専攻を考えている。昨年1年間のハバフォードでの経験を通じて、照明や音、公園や道路の有無といった物質的な空間デザインの要素が、場所の空気感を作り出し、人の心に影響を与えることを学んだ。

ハバフォード大学の学生は私たちのことを「ハバフォードイアン」と呼ぶ。毎日の授業、クラブ活動や寮での交流において、オープンな関係を築くようデザインする彼らはコミュニティーの建築家だ。このハバフォードイアンたちの中で私は、いつの日か、共同体の平和的共存を、間接的だが自然に、促進していけるような空間デザイナーになることを目指したい。（会報編集部抄訳「The Japan News 2016年9月11日」）